

1次/2次コントロールにおける Back/up モデルの検証

—— 尺度作成と否定的事態に対するコントロール方略の作動関係 ——

塚原 拓馬*

1次/2次コントロール理論においては、1次コントロール(PC)が低下しても、2次コントロール(SC)により補償されることで、抑うつを回避することができる「Back/up モデル」が仮定されている。そこで、本研究では1次/2次コントロール尺度を作成し、Back/up モデルの検証を行った。研究1では、798名に対して否定的事態に対する認知的方略に関する自由記述を行った。研究2では、564名に対する調査を行い、探索的因子分析より「解決志向」と「因果分析」及び「意味受容」と「思考調整」4因子が抽出された。また、確認型因子分析より前者の2因子(「解決志向」と「因果分析」)は「PC」、後者の2因子(「意味受容」と「思考調整」)は「SC」という上位概念により構成されることがモデルの適合度より明らかになった。研究3では、645名に対する調査を行い、抑うつ傾向を従属変数とした分散分析を行った結果、「PC(高・低群)」と「SC(高・低群)」、「解決志向(高・低群)」と「意味受容(高・低群)」に有意な交互作用が見られた。「解決志向(高・低群)」と「思考調整(高・低群)」、「因果分析(高・低群)」と「思考調整(高・低群)」及び「意味受容(高・低群)」には有意な交互作用が見られなかった。これにより、大枠では2次コントロールは1次コントロールの低下を補償する Back/up モデルが支持された。

キーワード：2次コントロール、1次コントロール、学習性無力感理論、Back/up モデル

問 題

生体が統制不可能な不快刺激に曝されると、もはや回避行動を行わなくなり、無力感を呈す。Overmier & Seligman (1967) により解明されたこの現象は、学習性無力感 (Learned Helplessness: LH) と名付けられ、様々な生体で追試された後、人間へ適用された (Hiroto & Seligman, 1975)。この人間の無力感反応は心因性の抑うつ症状に相当すると仮定され、LH 理論は人間のうつ病の発生メカニズムを理解するための理論として注目された。

Seligman (1975) は、この無力感反応の発生メカニズムに対し「統制不可能性 (uncontrollability)」という理論軸を据えたが、反証する追試研究も見られた。例えば、統制不可能な認知課題を行うと後続課題の成績が促進される促進効果 (Roth & Bootzin, 1974) や、統制不可能な成功経験でも LH が生じる現象 (Griffith, 1977) などであり、いわゆる無力感現象に対する個人差が生じたため、統制不可能性という理論軸だけでは説明できなくなり、理論の修正が迫られた。

この点を受けて、幾つかの説明仮説が提起された。例えば、統制不可能性刺激を受けた後にテスト課題で

反応が上がるのは、統制の知覚を過小評価することで、課題への動機づけが低下するのを防ぐとする防衛仮説 (Frankel & Snyder, 1978)、統制不可能性刺激を受けたことによりテスト課題に対する心理的反発が生じ、動機づけが低下しないというリアクタンス説 (Wortman & Brehm, 1975) などがその代表的なものである。

しかし、これらの説明仮説は動機づけの変動に焦点を当てるものであり、統制不可能性と無力感反応との対応関係や個人差の説明が明確になっていないため、Abramson, Seligman, & Teasdale (1978) は、Weiner (1974) の原因帰属理論を取り入れ、理論を改訂した。これは、否定的事態の原因を内的・安定的・全般的次元に帰属することで無力感が生起するというものである。だが、その改訂 LH 理論でも無力感の発生プロセスを十分に説明できておらず、改訂理論についても多くの批判がなされた (Coyne & Gotlib, 1983; 三井, 1983; 宮田, 1989; Wortman & Dintzer, 1978)。つまり、原因帰属が内的・安定的・全般的になされても、無力感の生起を十分に予測できなかった訳である。そして、否定的事態に対する原因帰属より統制不可能性の知覚の方が抑うつを予測することが検証され (例えば, Brown & Siegel, 1988)、LH 理論の中核であった統制の知覚を軽視したことによる理論的問題が明らかとなった (荒木, 2003; 坂本, 1997; 塚原, 2007)。

* 上田女子短期大学
〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620

LH 理論における 1 次/2 次コントロール

さて、論は少し戻るが、この LH 理論が人間に適用された際、前述のその他の説明仮説以外にも 1 次/2 次コントロール仮説 (Rothbaum, Weisz, & Snyder, 1982) があった。これは、統制不可能な事態に直面した生体は、まずその事態を「どうにかしよう」(統制可能性)と事態に働き掛けるが、「どうにもできない」(統制不可能性)場合は、その事態から積極的に意味を見出し、解釈することにより認知的調節を行い、その事態を受容することで認知的に統制するというものである。この直接に事態を統制しようとする外的な意味での統制を 1 次コントロール「Primary Control : PC」、間接に事態を統制しようとする内的な意味での統制を 2 次コントロール「Secondary Control : SC」という (Rothbaum et al., 1982)。

この PC/SC は、Rothbaum et al. (1982) により提起されて以来、原因帰属という理論の影で暫く殆ど注目されて来なかったが、近年になって、生涯発達の視点を取り入れた Heckhausen & Shultz (1995, 1996) による Life-Span Control 理論において、形を代えて注目されるようになった。だが、この PC/SC は、本来 LH 理論などの「統制論」に対する一つの修正仮説として提起されたものであり、人間の最適発達を説明する概念以前に、LH 理論のような「統制」を理論軸とする諸理論の修正仮説として、今後も検証される価値と可能性が残されているのではないか。なぜなら、前述の LH 理論に対するその他の説明仮説は、いずれも統制の知覚に対する概念的な位置づけを十分に考慮しておらず、LH の下位症状とされる認知・情動・動機づけの障害といった受動的反応を明確に説明していないが、この PC/SC は統制の知覚を理論軸に据えた上で、LH 理論に対して指摘されてきた個人差の問題や受動的反応の説明を仮定できるものだからである。塚原 (2008) によれば、この PC/SC は、原因帰属やその他の説明仮説の中で、統制という理論軸を中心に据えた上で無力感の発生機序を説明し、LH 理論を修正できる最適仮説であると考えている。

ただし、PC/SC には LH 理論の修正モデルや人間の最適発達を説明する認知変数として検証していくにあたり、以下の重要な課題が残されている。それは、主に「下位概念の特定」と「作動関係の検討」である。例えば、前述の Rothbaum et al. (1982) や Heckhausen & Shultz (1995) の研究では、下位概念の異同に不明確が見られ、統制に対する認知的作用も十分に考慮されていない。また、この PC/SC の作動関係は、PC が

低下した場合 SC の作用により補償される Back/up モデルが支持されているが (Chipperfield, Perry, & Menec, 1999; Thompson, Thomas, Rickabaugh, Tantamjarik, Otsuki, Pan, Garcia, & Sinar, 1998)、各下位概念における作動関係が十分に考慮されていない¹。

まず、Rothbaum et al. (1982) は、PC/SC の下位概念について、結果を否定的に予測する「予期」、運と自己を同期させる「架空」、強力な他者と連合する「代理」、状況から意味を見出す「解釈」の 4 概念で構成している。しかし、「代理」と「架空」の概念的類似性が高いとされ、「架空」や「予期」は統制の放棄とも捉えられ不適応反応にも関連するため (Peterson, Maier, & Seligman, 1993)、統制の知覚を維持し受動的反応を回避する認知変数としては不十分である。また PC/SC の作動関係についても、SC は PC の低下を補償するのか (Back/up)、両者は単独で受動的行動に寄与するのか (Discrimination)、明確に規定されていない。Morling & Evered (2006) によれば、Rothbaum et al. (1982) の作動関係についての説明は難解であると指摘している。

また、Heckhausen & Shultz (1996) は、PC/SC の下位概念について、Baltes & Baltes (1980, 1990) の「選択 (資源を有効に投資して適応すること) と補償 (失敗や喪失による否定的反応を緩衝すること)」の概念を融合し、個人が直接的に資源を投資する「選択 PC」、与えられた目標価値を高める「補償 PC」、外的スキルを活用する「選択 SC」、失敗への防衛的解釈である「補償 SC」の 4 概念を設定している。だが、「Control」と名称しながらも概念的にも実証においても「統制」が十分に考慮されておらず、そのため下位概念も PC/SC 本来の統制に関する認知的作用が希薄化している。また、作動関係については、「選択 PC と補償 SC」との関係以外は十分に検証されておらず (塚原, 2008)、その他の下位概念間の関係は明らかになっていないため、各下位概念の独自性が不明確である。

これらの諸問題を解決していくためには、「統制」という概念を主軸に据えて概念規定を行い、PC/SC の下位概念を特定し、PC/SC の関係性を実証的に研究していくことが必要である。そこで、本研究では、まず PC/

¹ この PC/SC の作用に対する概念的・数量的関係性を示す場合、本論では PC/SC の「作動関係」という語を用いる。この PC/SC の作動関係は、低 PC を高 SC が補償する Back/up モデルと両者は単独で作動する Discrimination モデルが仮定されている。先行研究では、概念的にも実証においても Back/up モデルが大枠で支持されているため (塚原, 2008)、本研究でも Back/up モデルを仮定するものとする。

SCの下位概念を検討し(研究1), PC/SCを測定する尺度を作成する(研究2)。そして, 当該尺度を応用し, PC/SCの作動関係についても検証する(研究3)。

PC/SCの概念規定と測定尺度

以上の議論を踏まえて, 次にPC/SCの概念規定と測定尺度について述べる。まず, このPC/SCは, Rothbaum et al. (1982)によりLH理論などの「統制論」は1次系の統制のみに注目し, 2次系の統制には注目していないことを理由に提起された経緯があることから, PC/SCともに統制に関する概念であることが必要条件であると思われる。また, PC/SCの認知的作用は, 適応反応を予測することが検証されていることから(例えば, Grootenhuis & Last, 1997), PC/SCは適応反応と関連する認知変数であると考えられる。

また, 下位概念については, PCはLH理論などの「統制」に相当する概念であるため(Rothbaum et al., 1982), 事態に直接的に働き掛けて, 統制の知覚を維持する認知的作用であると考えられる。一方のSCは, 事態を解釈し受容する認知的作用(Rothbaum et al., 1982; Thompson et al., 1998)だけでなく, 受容するために思考を調節し意味づける作用(Azuma, 1984; Weisz, Rothbaum, & Blackburn, 1984)が包含されているものと考えられる²。

そこで, 概念定義については, 統制に対する認知的作用を明確にして規定された塚原(2008)による定義を参考とする。すなわち, PCは否定的事態及び結果に対して統制不可能性を回避するために, 「既存の認知を作用させ, 事態を変化させる認知的操作」であり, SCは否定的事態及び結果に対して統制不可能性を回避するために, 「自己の認知を調節し, 事態を受容する認知的操作」とする。

次に, このPC/SCを測定する尺度については, 我が国において中島(2005)により作成されている。ここでは, Heckhausen & Shultzの理論に基づいて, PCを行動, SCを認知と規定してPC/SCを測定しているが, 下位概念の異同に不明確が見られる³。また, PC/SCは統制の認知に関する概念である以上, PCでも

SCでも統制に対する認知的作用は不可欠であり, PCが行動に限定されて規定されることは概念的にも名義的にも不十分である。

そのため, 本研究ではHeckhausen & ShultzのLife-Span Control理論には準拠せず, PCを認知, SCを行動と弁別せずに測定する。またPC/SCは具体的な行動を含まず, 主に認知的作用によって尺度を構成する。そして, PC/SCの「統制」に焦点を当てた概念規定により尺度を作成し, 「下位概念の検討」と「PC/SCの作動関係の検証」を行うことを目的とする。

研究 1

目的

前述の問題提起及び概念規定に基づき, 尺度作成のための項目収集を行う。ここでは, 得られた自由記述を省略型累積KJ法(川喜田・牧島, 1970)によりカテゴリー化と項目化を行う⁴。

方法

2006年6月から7月にかけて, X大学, Y大学において, 大学生798名(平均年齢20.05歳, $SD=2.63$, 年齢不明4名)に対し, 自由記述による回答を求めた。男性389名(平均年齢19.98歳, $SD=2.01$), 女性409名(平均年齢20.09歳, $SD=3.06$)であった。

自由記述は「今までの日常生活の中で, ネガティブな出来事(悩みや問題)を経験したときのことを思い出してください。その出来事(出来事そのものや出来事にまつわることを)をどうにかするために, どのような「考え」や「思い」を持ちましたか? (①) また, 自分ではどうにもできないと考えた時, 落ち込まないようにするために, どのような「考え」や「思い」を持ちましたか?

² なお, このPC/SCと類似性の高い概念に, コーピング(Lazarus & Folkman, 1984)や認知的統制(Bandura, 1977)がある。だが, コーピングは認知的作用だけでなく, 気晴らし行動などの具体的な行動や回避的方略も含まれており, 「統制」を中心に規定されているものではない。また, 認知的統制は認知だけでなく行動や思考の抑制も含まれており(cf. McCarthy & Newcomb, 1992), 一方のSCは感情や思考を抑制させるのではなく, 思考を調節し統制を維持するための認知的作用であることから, SCの認知的作用とは異なるものである。

³ 中島(2005)の尺度では, 目標に集中する認知的資源である選択SCに補償SC(認知的切替)ともとれる項目(cf. やってもだめなことはあきらめて他の事をするように気持ちを切り替える)が含まれており, 下位概念の異同に不明確が見られる。これは, 恐らくHeckhausen & Shultzの理論的問題に由来するものとも考えられる。Life-Span理論は, 選択と補償の概念を取り入れたために, PC/SC本来の作用が希薄化しており, 「補償PCと選択SC」, 「選択SCと補償SC」などの下位概念の差異が不明確である。

⁴ 累積KJ法にはW型解決法を適用した6ラウンド(もしくは13ラウンド)W型累積KJ法があるが, 本研究ではKJ法の基本的1ステップ(ラベル作成・グループ編成・A型図解・B型文章化)を2度以上重ね, かつB型文章化は口頭等にて省略する(B型)省略型累積KJ法を用いた。累積は非常に複雑で多量のデータを綿密に処理していく場合に用いられ(川喜多, 1967), 省略型累積KJ法は最も実用性が高いとされているため(川喜多, 1970), 本研究ではこの方法を適用した。

②」という教示文により、集団式で行われた。回答収集後、PC/SCに相当する各カテゴリーを検討するために、「①」をPC候補、「②」をSC候補として、著者による累積KJ法を行った。

結果及び考察

PCの項目収集 PCのカテゴリーを作成するために、収集した自由記述から累積KJ法を行った。まず、質問項目としては極めて不適切な回答を除外し、KJ法によってカテゴリー化を施したところ、計16カテゴリーが得られた。さらに、これを大カテゴリーに分けると計6カテゴリーが得られた。ここで、再度KJ法によるカテゴリー化を施した結果、計15カテゴリーが得られた。さらに、これを大カテゴリーに分けると、計5カテゴリーが得られた。以上のKJ法から共通するカテゴリーを抽出すると、計5カテゴリー「解決、直接介入、肯定思考、帰属、分析思考」が得られた。そして、各カテゴリーの自由記述から、意味内容が共通している言語的表現や語句を選出し、尺度項目として活用するために文章化を行ったところ計17項目が作成された。

以下にPCの各カテゴリーと項目内容から概念的妥当性について議論する。まず、「帰属」(cf. 自分の何が原因でそうなったかを考える)や「分析的思考」(cf. どうしてそうなったのか考える)は、原因の内容を検討し、帰属次元を特定しない因果的思考であるから、原因帰属(Weiner, 1974)とは等質なものではない。このような因果的思考は、事象が説明可能なものになれば自身の環境を効果的に管理することができ、統制の感覚を強化することに繋がるため(例えば、Forsyth, 1980)、統制不可能性を回避する認知変数として妥当なものと考えられる。また、「解決」(cf. 自分の力で解決できるように努める)と「直接介入」(cf. いま自分ができる最善のことをしようとする)は、事態の解決に向けて働きかける思考に関する内容である。統制とは生体の反応に依存して受動的反応が生じる(もしくは生じない)という随伴性による概念であり、事態を解決しようとする思考は、自らの反応により受動的反応を回避するための随伴的な認知的作用であると捉えることができるため、PCの概念に整合するものであろう。しかし、「肯定的思考」(cf. 前向きになるように努める)は、事態を変化させるための認知作用というよりも、思考を肯定的に調節するものであり、寧ろSCに相当する成分であると思われる。塚原(2002)においても、肯定的予期はSCの下位概念として扱われている。従って、当該カテゴリーはPCの概念とは整合しないものと思われる。以上の議論により、PCの項目候

補として「解決・直接介入・帰属・分析思考」の4カテゴリー、計12項目を選定した。

SCの項目収集 SCについて収集した自由記述から、質問項目としては極めて不適切な回答を除外し、KJ法によってカテゴリー化を施したところ、計21カテゴリーが得られた。さらに、これを大カテゴリーに分けると、計6カテゴリーが得られた。ここで、再度KJ法によるカテゴリー化を施した結果、計29カテゴリーが得られた。さらに、これを大カテゴリーに分けると計6カテゴリーが得られた。以上のKJ法から共通するカテゴリーを抽出すると、計6カテゴリー「思考停止、思考転換、(他者)気晴らし、受け止め、大局視野、積極落ち込み」が得られた。そして、各カテゴリーの自由記述から、意味内容が共通している言語的表現や語句を選出し、尺度項目として活用するために文章化を行ったところ計60項目が作成された。

次にSCのカテゴリーと項目内容から概念的妥当性について議論する。まず、「思考停止」(cf. できるだけそのことに関して考えないようにする)であるが、このような回避的方略は統制の放棄とも関連し(Peterson et al., 1993)、抑うつの高さと関係することも報告されている(Wenzlaff, Wegner, & Roper, 1988)。SCは思考を停止するのではなく、思考を調節し受容させる認知変数であるため、SCの構成概念には合致し得ないと考える。次に、「(他者)気晴らし」(cf.好きなことをして気を紛らわそうとする)についてもストレス状態を直接的に改善するものではなく、気逸らし依存など不適応的な面がある(例えば、Hunt, 1998)。また、これは回避的方略のように事態から逃避し、統制を放棄する要素が包含されているため、SCとは異なる作用であろう。さらに、「積極的落ち込み」(cf. 落ち込みなければ落ち込もうと考える)についても、自己の気分状態に焦点を当てることは抑うつをより助長し長期化することが指摘されていることから(名倉・橋本, 1999)、SCの下位成分としては妥当でないと考えられる。そして、「受け止め」(cf. 現実をそのまま受け入れる)については、Morling & Evered (2006)によれば、SCの下位概念としては単なる受容では不十分であり調節的要素が必要であることを説いている。当該カテゴリーには否定的受容とも取れる項目が含まれ(cf. ひたすら耐え忍ぶ)、認知的調節による解釈の伴わない受容であることから、SCの概念とは十分に整合しない。最後に「大局視野」(cf. 将来を考えれば無駄なことは何もないと思う)は、事態だけに思考を固着せず、視野を広げてその事態を解釈しようとする思考である。このように事態を解釈し意味付けていく認知方略は統制

の維持と関係し (Rothbaum et al., 1982), SC の概念に合致するものと思われる。また, 「思考転換」(cf. これを乗り越えればあとは必ずよくなると思う) についても, Azuma (1984) は SC の作用における譲歩的思考の肯定的価値を指摘している。既存の思考を譲歩的に調整することは, 事態を受容し統制の維持に繋がる認知的作用であると思われる (Weisz et al., 1984), SC の概念に整合すると考えられる。以上の議論により, SC の項目候補として「思考転換・大局視野」の 2 カテゴリー, 計 12 項目を選定した。

研究 2

目的

研究 1 で作成された暫定的な質問項目に対し, 探索的因子分析及び確証型因子分析により, 下位因子の検討と尺度項目の決定を行う。

方法

2007 年 12 月 X 大学及び Y 大学において集団式質問紙法による調査を行った。参加者は合計 599 名であった。なお, 1 項目以上欠損があるもの, 全ての項目に同じ数字に回答したもの, 全体の 80% 以上に同じ回答をしたものは分析から除外したところ, 564 名 (平均年齢 20.00 歳, $SD=1.97$) の有効回答が得られた。その内訳は, 男性 282 名 (平均年齢 20.09 歳, $SD=1.16$), 女性 282 名 (平均年齢 19.95 歳, $SD=2.55$) であった。調査項目は研究 1 で選出された項目に対して, 「とてもあてはまる (5)」～「全くあてはまらない (1)」の 5 件法によって回答を求めた。なお, 分析においては研究 1 の概念考察で妥当性が検討された PC の 4 カテゴリーと SC の 2 カテゴリーを分析対象とした。

結果及び考察

探索的因子分析による下位因子の検討 まず, PC の「解決・直接介入・帰属・分析思考」の 4 カテゴリー 12 項目, SC の「思考転換・大局視野」の 2 カテゴリー 12 項目の合計 24 項目に対して, 平均値, 標準偏差を算出した。そして天井効果の見られた 1 項目を分析から除外した。次に残り 23 項目に対して主因子法による探索的因子分析を行った。初期解の固有値の推移は, 7.40, 3.02, 1.47, 1.22 であり, 「固有値 1 以上, 因子解釈可能性, 下位尺度 3 項目以上」等の条件から判断し, 4 因子が抽出され, Promax 回転を行った。因子負荷量 .40 以下の項目, 2 つ以上の因子にはほぼ同等な負荷量を示した項目, また KJ 法で SC のカテゴリから抽出された項目で PC の因子に高い負荷量を示した項目, それら計 3 項目を除外した。そして再度主因

子法 (Promax 回転) による因子分析を行ったところ, 回転前の 4 因子で 20 項目の全分散を説明する割合は 60.03% であった。回転後の因子パターンと因子間相関及び項目内容を Table 1 に示す。

まず, 第 1 因子は 6 項目で構成され, 「自分の人生において意味のある経験になったと考える」など, 統制不可能な否定的事態から肯定的意味を引き出して, 受容していく内容であるため, 第 1 因子を「意味受容」因子 (SC 下位尺度) と命名した。また, 第 2 因子は 6 項目で構成され, 「自分の努力でどうにかしようと思う」などであり, 積極的に事態を解決しようとする内容であり, 事態の統制に関する認知的成分であると判断されることから, 第 2 因子を「解決志向」因子 (PC 下位尺度) と命名した。次に第 3 因子は 4 項目で構成され, 「どうしてそうなってしまったのか考える」などであり, 統制不可能な事態の因果関係を分析する項目であることから, 第 3 因子を「因果分析」因子 (PC 下位尺度) と命名する。そして, 第 4 因子は 4 項目で構成され, 「これを乗り越えればあとは必ずよくなると思う」など思考を肯定的に調整する内容であることから第 4 因子を「思考調整」因子 (SC 下位尺度) と命名した。

信頼性分析(内的整合性)と下位尺度間の相関 各因子に該当する項目得点の合計により, 下位尺度得点を求め, 各下位尺度の平均値及び標準偏差を算出した (Table 2)。また, 内的整合性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したところ, 「意味受容」 $\alpha = .871$, 「解決志向」 $\alpha = .837$, 「因果分析」 $\alpha = .812$, 「思考調整」 $\alpha = .722$ であった。そして, 4 つの下位尺度のうち PC の「解決志向」と「因果分析」($r = .599$), SC の「意味受容」と「思考調整」($r = .516$) は高い相関が見られた (Table 3 参照)。

以上の結果より, PC 2 因子, SC 2 因子の 4 尺度計 20 項目を総称して 1 次/2 次コントロール尺度 (Primary/Secondary Control Scale; PSC) とする⁵。

高次確証型因子分析による概念構造の検討 相関分析において PC の下位因子と SC の下位因子が, 相互に高い相関を示した結果から, 「PC」, 「SC」という上位概念が仮定できると考えられる。そこで, 因子構造

⁵ SC の尺度項目について, 塚原 (2002) は「再検討・代理・肯定的予期」を抽出している。再検討は, 事態を解釈するための思考と思われ, 本研究における意味受容と類似しているが, 事態に意味を見出す「受容」の成分が組み込まれている点で, 「意味受容」因子の方がより概念に整合すると思われる。また, 代理は架空と類似しており (Rothbaum et al., 1982), 概念的弁別性が低く, 本研究における概念規定とも整合しない。なお, 肯定的予期は「思考調整」と類似性があるものと思われる。

Table 1 1次/2次コントロール尺度 (PSC) の因子分析結果

項目内容	「意味受容」	「解決志向」	「因果分析」	「思考調整」
自分の人生において意味のある経験になったと考える	0.84	-0.04	0.03	0.00
その出来事のおかげで自分に得られたものもあると考える	0.83	0.00	-0.07	-0.06
この出来事から何か学び取ろうと考える	0.76	0.00	0.15	-0.12
いやなことも自分の成長のためだと考える	0.68	0.06	-0.06	0.03
それは自分に与えられた試練なのだと考える	0.55	0.11	-0.08	0.14
将来を考えれば無駄なことは何もないと考える	0.51	-0.01	0.07	0.25
自分の努力でどうにかしようと思う	0.05	0.74	-0.08	0.04
自分の力で解決できるように努める	0.04	0.70	-0.05	-0.03
解決するにはどうしたらよいかを考える	-0.04	0.67	0.13	-0.08
その出来事を克服するために努力しようと思う	0.14	0.63	0.01	-0.08
状況を変えるために解決策を考える	-0.16	0.59	0.27	0.05
いま自分ができる最善のことをしようとする	0.04	0.55	-0.01	0.10
どうしてそうなってしまったのか考える	-0.03	-0.07	0.83	0.03
なぜそのネガティブな出来事が起こったのか原因を調べる	0.02	-0.01	0.82	-0.01
自分の何が原因でそうなったのかを考える	0.10	0.10	0.59	-0.07
その出来事について色々と分析する	-0.03	0.10	0.56	0.03
これを乗り越えればあとは必ずよくなると思う	-0.06	0.11	0.04	0.73
いつか結果が出て楽しいときが来ると考える	-0.04	0.07	0.00	0.64
長い人生の中ではこんなこともあると考える	0.19	-0.15	0.04	0.60
人生何とかなるだろうと思うように心がける	0.00	-0.08	-0.07	0.52
因子間相関				
	「意味受容」	-	.466	.307
	「解決志向」		-	.660
	「因果分析」			-
	「思考調整」			.137
				-

Table 2 各尺度得点の平均値, 標準偏差 (研究2)

	全体 (N=564)		男性 (N=282)		女性 (N=282)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
「意味受容」	22.58	4.25	23.09	4.21	22.08	4.24
「解決志向」	21.03	5.48	21.13	5.56	20.93	5.41
「因果分析」	14.72	3.36	15.00	3.32	14.45	3.38
「思考調整」	14.31	3.33	14.14	3.36	14.48	3.31

Table 3 下位尺度得点間の相関

	「意味受容」	「解決志向」	「因果分析」	「思考調整」
「意味受容」	-	.436**	.297**	.516**
「解決志向」		-	.599**	.253**
「因果分析」			-	.116**
「思考調整」				-

** $p < .01$

を検討するために確証型因子分析を行った。なお、分析には Amos 16.0 を使用し、適合度指標については、GFI=0.90, AGFI=0.89, RMSEA=0.05 の値を基準とした。また、 χ^2 値については、標本数や他の適合度指標との関係を考えて絶対的な基準としては使用しなかった。

まず、「因果分析」と「解決志向」の2因子とその上位概念として「PC」、 「意味受容」と「思考調整」の2因子に対しても「SC」の上位概念を仮定した。そして、上位概念の「PC」と「SC」には相関を仮定して、高次の確証型因子分析を行った。その結果、モデル適合度は容認できる指標が得られた ($\chi^2(161)=390.96$, $p < .001$, GFI=0.937, AGFI=0.917, RMSEA=0.050)。また、「PC」と「SC」の相関は、 $r = .52$ であった。

以上の結果より、「PC」及び「SC」という上位概念を仮定して両者の作動関係を検討する概念的妥当性が明らかとなった。なお、上位概念の内的整合性を検討するために、「解決志向」と「因果分析」の尺度得点の合計により「PC」の尺度得点を算出し、「意味受容」と「思考調整」の尺度得点の合計により「SC」の尺度得点を算出した。そして、Cronbach の α 係数を算出したところ、「PC」 $\alpha = .875$ 、「SC」 $\alpha = .742$ であった。

研究 3

目的

本研究では、研究2で作成されたPSCを応用し、確証型因子分析により因子構造を確認の上、PC/SCの作動関係(Back/upモデル)について検証する。

この Back/up モデルに基づけば、PCが高い場合はSCの高低によらず抑うつを回避できる。しかし、PCが低い場合でもSCが高ければ、抑うつを回避することができると考えられる。そこで、以下の仮説が立てられる。(1)PCが低い場合において、SCが高い方が、SCが低い方よりも抑うつ得点が低いであろう。(2)PCが高い場合、SCの高低によらず抑うつ得点には差がないであろう。以上の仮説を検討するために、PC/SCの交互作用及び、PCのレベル(高低)ごとにSCの単純主効果を検証する。

方法

2009年4～5月にかけて、A～E大学の計5校において集団式質問紙を行った。参加者は合計721名であった。なお、全ての項目に回答せず1項目以上欠損があるもの、全ての項目に同じ数字に回答したもの、全体の80%以上に同じ回答をしたものは分析から除外したところ、645名(平均年齢19.86歳、 $SD=2.12$ 、うち不明5名)の有効回答が得られた。男女別の内訳は、男性316名(平均年齢19.95歳、 $SD=1.51$)、女性324名(平均年齢19.77歳、 $SD=2.58$)であった。

なお、調査項目は研究2で作成されたPSCの他に、SDS「自己評価式抑うつ尺度(Zung, 1965)」の日本語版(福田・小林, 1973)を使用した。

結果

確証型因子分析による高次因子分析 因子構造を確認するために確証型因子分析を行った。研究2と同様に、「因果分析」と「解決志向」に対し「PC」を仮定し、「意味受容」と「思考調整」に対し「SC」を仮定し、そして「PC」と「SC」には相関を仮定して高次確証型因子分析を行った。その結果、モデル適合度は容認できる指標が得られた($\chi^2(161)=463.34, p<.001, GFI=0.931, AGFI=0.910, RMSEA=0.054$)。また、「PC」と「SC」の相関は、 $r=.54$ であった。この結果より、因子構造の安定性が検証された。

PC/SCによる抑うつ得点の差 (Back/up モデル検証) 各尺度の基本統計量を Table 4 に示した。まず、「PC」と「SC」の尺度得点の平均値を基準としてPC高群・PC低群、SC高群・SC低群に分類した。そして、「PC(高・低群)」と「SC(高・低群)」を独立変数、SDSを従属変数とした2要因分散分析を行った。同様に、各尺度得点の平均値を基準として4つの下位因子に対しても高群・低群を分類し、2要因分散分析を行った。

その結果、「PC(高・低群)」と「SC(高・低群)」に有意な交互作用($F(1,641)=9.15, p<.01$)が見られた(Figure 1: Table 5)。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、「PC低群」における「SC」の単純主効果($F(1,641)=24.10, p<.001$)が有意であり、「PC高群」における「SC」の単純主効果は有意でなかった($F(1,641)=.73, ns$)。なお、「SC高群」における「PC」の単純主効果は有意でなく($F(1,641)=2.79, ns$)、「SC低群」における「PC」の単純主効果は有意であった($F(1,641)=7.06, p<.01$)。

次に、各下位概念間の交互作用を検討したところ、「解決志向(高・低群)」と「意味受容(高・低群)」に有意な交互作用($F(1,641)=4.00, p<.05$)が見られた(Figure 2: Table 6)。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、「解決志向(低群)」における「意味受容」の単純主効果($F(1,641)=15.97, p<.001$)が有意であり、「解決志向(高群)」における「意味受容」の単純主効果は有意でなかった($F(1,641)=2.27, ns$)。また、「意味受容(高群)」における「解決志向」の単純主効果は有意でなく($F(1,641)=.20, ns$)、「意味受容(低群)」における「解決志向」の単純主効果は有意であった($F(1,641)=6.55, p<.05$)。

なお、「解決志向(高・低群)」と「思考調整(高・低群)」、「因果分析(高・低群)」と「意味受容(高・低群)」、「因果分析(高・低群)」と「思考調整(高・低群)」には交互作用は検出されなかった。

Table 4 1次/2次コントロール尺度(PSC)と抑うつ得点(SDS)の平均値、標準偏差(研究3)

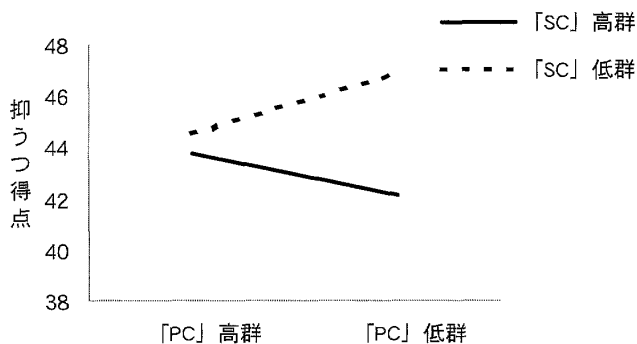
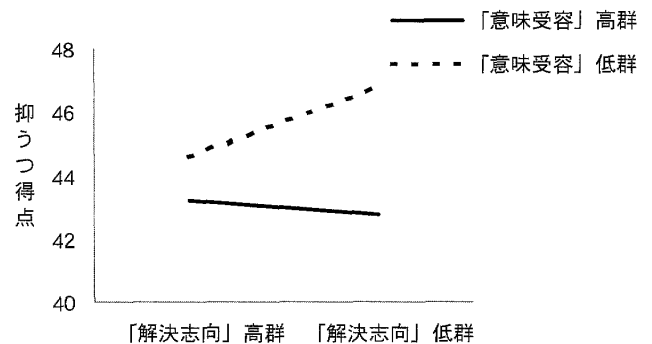
	全体(N=645)		男性(N=316)		女性(N=324)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
「PC」	39.04	6.31	38.46	6.46	39.64	6.10
「解決志向」	23.38	4.18	23.19	4.03	23.58	4.30
「因果分析」	15.66	3.27	15.28	3.46	16.05	3.01
「SC」	34.05	8.08	34.34	8.08	35.56	8.06
「意味受容」	20.63	5.51	20.26	5.50	23.58	5.52
「思考調整」	14.32	3.47	14.08	3.39	14.58	3.54
SDS(抑うつ得点)	44.70	7.99	44.00	7.49	45.36	8.44

Table 5 「PC」高低群と「SC」高低群による抑うつ得点(SDS)と分散分析結果

Primary Control (PC)		「PC」 高群 (N= 331)		「PC」 低群 (N= 314)		主効果		交互作用
Secondary Control (SC)		「SC」 高群 (N= 210)	「SC」 低群 (N= 121)	「SC」 高群 (N= 93)	「SC」 低群 (N= 221)	「PC」	「SC」	
SDS	Mean	43.72	44.49	42.09	46.85	0.30	17.55**	9.15**
(抑うつ得点)	SD	7.94	8.19	7.85	7.50			

** $p < .01$ **Table 6** 「解決志向」高低群と「意味受容」高低群による抑うつ得点 (SDS) と分散分析結果

解決志向		「解決志向」高群 (N=332)		「解決志向」低群 (N=313)		主効果		交互作用
意味受容		「意味受容」 高群 (N=207)	「意味受容」 低群 (N=125)	「意味受容」 高群 (N=82)	「意味受容」 低群 (N=231)	「解決志向」	「意味受容」	
SDS	Mean	43.22	44.56	42.76	46.79	1.73	15.97**	4.00*
(抑うつ得点)	SD	8.06	7.78	7.50	7.78			

* $p < .05$, ** $p < .01$ **Figure 1** 「SC」の高低による「PC」高低と抑うつ得点との関連**Figure 2** 「意味受容」高低による「解決志向」高低群と抑うつ得点との関連

考察

分散分析の結果より、PCとSCではSDSに対して交互作用が見られたことから仮説(1)を支持した。そして、「PC低群」における「SC」の単純主効果が見られ、「PC高群」における「SC」の単純主効果は見られなかったことから仮説(2)を支持する結果となった。また、PC「解決志向」とSC「意味受容」においても仮説(1)・(2)が支持された。以上の結果から、PCが高い場合はSCの高低によらず抑うつを回避し、PCが低い場合でも、SCが補償する(Back/up)というPC/SCの作動関係が支持される可能性が明らかとなった。即ち、解決が難しいと認知されるストレス事態に直面した場合、その事態から意味を見出し受容することで、抑うつの発生を抑えることができる可能性が明らかとなった。

一方、「解決志向」と「思考調整」、「因果分析」と「意味受容」及び「思考調整」には交互作用が見られなかつ

た。そのため、今後は抑うつ以外の他の適応指標を用いて検証するなど、これら各下位概念のBack/up作動関係をさらに検証していく必要性が残された。

理論的には、災害や難病などのように、PCによる解決が難しいストレス事態に直面した場合(PC低下)、思考を調整して将来を肯定的に想起することは、不適応反応を回避するものと思われる。また、複雑な要因が絡む対人ストレスなど、因果関係を分析することが困難な場合(PC低下)、分析し続けるよりも、事態に意味を見出して受容したり、思考を調整し肯定的な将来を想起したりすることも効果的であると考えられる。

この点について明らかにしていくためには、実際のストレス事態との関係性も考慮する必要があるものと思われる。例えば、ストレス事態があまりに厳しい場合(例えば災害や難病など)、肯定的な将来を想起する(思考調整)だけでなく、その事態から意味を見出して受容

する(意味受容)ことが、より適応の維持に貢献するのかもしれない。つまり、PC/SCの上位概念の作動関係と下位概念の作動関係は、実際のストレス事態の質や量に応じて異なる作用効果が見られるとも考えられる。本研究でも、このような作用効果の違いにより、「PC」と「SC」、「意味受容」と「思考調整」に交互作用が見られたものと思われる⁶。

そこで、今後は主に上位概念である「PC」と「SC」のBack/up作動関係と、各下位概念のBack/up作動関係の違いについて実証的に検討していくことが必要であると思われる。また、どのようなストレス事態に対して、SCのPCに対するBack/upモデルが有効に働くのかについて、ストレスの要因を踏まえながら、抑うつに対する影響を検討していくことが重要であると思われる。

総合考察

本研究では、PC/SCを測定する尺度を作成し、当該尺度を応用してPC/SCの作動関係を明らかにすることを試みた。ここでは、探索的因子分析により4つの下位概念が抽出された。さらに概念的仮説との整合を検証すべく確認型因子分析を行い、各下位概念は「PC」と「SC」という上位概念により構成されることが明らかとなった。また、PC/SCは、PCが低い場合にSCが補償する(Back/up)という交互作用によって抑うつを回避する可能性が示唆された。以下に、本研究の問題点及び今後の課題について考察する。

尺度の信頼性と妥当性について

本尺度は内的整合性ではほぼ十分な値を示したが、他の信頼性指標により検証をしていない。今後は再検査法などにより、信頼性をさらに検証していくことが必要であろう。

一方、妥当性については、本研究は理論モデルであるPC/SCのBack/upモデルについて検証していることから、構成概念妥当性の一部を検証しているとも

捉えられる。そこで、今後は抑うつと関係するとされている他の心理的変数との関係を明らかにしていくことで、さらに妥当性を検証していくことが必要である。例えば、BIG 5における神経症傾向や開放性(Trull & Sher, 1994)などの人格変数があげられよう。尺度の妥当性を高めるためにも、抑うつに關係する人格変数などとの関係を検討していく必要がある。

抑うつの変化の予測について

本研究は横断的であるため、抑うつの変化を予測することを目的としていない。一時点での抑うつ得点では、その時点での軽い落ち込み気分を測定している可能性もあり(例えば、伊藤・上里, 2002)、実際に抑うつ傾向にあるのか識別することは困難である。

そのため、近年、素因ストレスモデル(Metalsky, Abramson, Seligman, Semmel, & Peterson, 1982)をもとにして、縦断的研究によりストレスと心理的変数との交互作用により抑うつの変化の予測が検証されている(例えば、森本・丹野, 2004)。また、研究3でも考察されたように、PC/SC及び各下位概念はどのようなストレスに対してBack/up作用を有効に働かせるのかについて検討する必要性が明らかになっている。そこで、今後は、縦断的研究により、PC/SCとストレスの交互作用による、抑うつの変化の予測について検証していく必要がある。

以上、PC/SCは、実証的に展開されていくことで、人間行動に対する理解を深めるための重要な認知変数として議論されていくことが期待される。

引用文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. (1978). Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, *87*, 49-74.
- 荒木友希子 (2003). 学習性無力感における社会的文脈の諸問題 心理学評論, *46*, 141-157. (Araki, Y. (2003). A review of social contexts on learned helplessness. *Japanese Psychological Review*, *46*, 141-157.)
- Azuma, H. (1984). Secondary control as a heterogeneous category. *American Psychologist*, *39*, 970-971.
- Baltes, P. B., & Baltes, M. M. (1980). Plasticity and variability in psychological aging: Methodological and theoretical issues. In G. Gurski (Ed.), *Determining the effects of aging on the central*

⁶ 「PC」と「SC」の上位概念と「解決志向」と「意味受容」の下位概念に交互作用が見られた理由について、項目数の違いなどから、上位概念(PCまたはSC)に対する各2つの下位尺度の分散の違いによるものとも考えられる。すなわち、上位概念に対する重みが異なるため、「解決志向」と「PC」、「意味受容」と「SC」が近似した尺度である可能性も考えられる。そのため、今後はこの点も踏まえながら、各下位概念の交互作用効果を検討していく必要がある。なお、各尺度を標準化し、「PC」および「SC」と各2つの下位尺度の相関係数を算出したところ、「PCと解決志向」 $r=.861$ 、「PCと因果分析」 $r=.802$ 、「SCと意味受容」 $r=.939$ 、「SCと思考調整」 $r=.837$ であった。

- nervous system* (pp. 41-60). Berlin : Schering.
- Baltes, P. B., & Baltes, M. M. (1990). Psychological perspectives on successful aging : The model of selective optimization with compensation. In P. B. Baltes & M. M. Baltes (Eds.), *Successful aging : Perspectives from the behavior sciences* (pp. 1-34). New York : Cambridge University Press.
- Bandura, A. (1977). *Social learning theory*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall. (バンデュラ, A. 原野広太郎 (監訳) (1979). 社会的学習理論 人間の理解と教育の基礎 金子書房)
- Brown, J. D., & Siegel, J. M. (1988). Attributions for negative life events and depression : The role of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 316-322.
- Chipperfield, J. G., Perry, R. P., & Menec, V. H. (1999). Primary and secondary control-enhancing strategies : Implications for health in later life. *Journal of Aging and Health*, **11**, 517-539.
- Coyne, J. C., & Gotlib, I. H. (1983). The role of cognition in depression ; A critical appraisal. *Psychological Bulletin*, **94**, 472-505.
- Forsyth, D. R. (1980). The function of attributions. *Social Psychology Quarterly*, **43**, 184-189.
- Frankel, A., & Snyder, M. L. (1978). Poor performance following unsolvable problems : Learned helplessness or egotism ? *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 1415-1424.
- 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究, 精神神経学雑誌, **75**, 673-679. (Fukuda, K., & Kobayashi, S. (1973). A study on a Self-Rating Depression Scale. *Psychiatria et Neurologia Japonica*, **75**, 673-679.)
- Griffith, M. (1977). Effects of noncontingent success and failure on mood and performance. *Journal of Personality*, **45**, 442-457.
- Grootenhuis, M. A., & Last, B. F. (1997). Predictors of parental emotional adjustment to childhood cancer. *Psycho-Oncology*, **6**, 115-128.
- Heckhausen, J., & Shultz, R. (1995). A life-span theory of control. *Psychological Review*, **102**, 284-304.
- Heckhausen, J., & Shultz, R. (1996). A life-span model of successful aging. *American Psychologist*, **54**, 702-714.
- Hiroto, D. S., & Seligman, M. E. P. (1975). Generality of learned helplessness in man. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 311-327.
- Hunt, M. G. (1998). The only way out is through : Emotional processing and recovery after a depressing life event. *Behaviour Research and Therapy*, **36**, 361-384.
- 伊藤 拓・上里一郎 (2002). ネガティブな反すううつ状態の関連性についての予測的研究 カウンセリング研究, **35**, 40-46. (Ito, T., & Agari, I. (2002). A prospective study of the relationship between negative rumination and a depressive state. *Japanese Journal of Counseling Science*, **35**, 40-46.)
- 川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために— 中公新書
- 川喜田二郎 (1970). 続・発想法—KJ法の展開と応用— 中公新書
- 川喜田二郎・牧島信一 (1970). 問題解決学—KJ法ワークブック— 講談社
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York : Springer. (ラザルス, R. S.・フォルクマン, S. (著) 本明 寛・織田正美・春木 豊 (監修) (1991). ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版)
- McCarthy, W. J., & Newcomb, M. D. (1992). Two dimensions of perceived self-efficacy : Cognitive control and behavioral coping ability. In R. Schwarzer (Ed.), *Self-efficacy : Thought control of action* (pp. 39-64). Washington, DC : Hemisphere.
- Metalsky, G. I., Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., Semmel, A., & Peterson, C. (1982). Attribution style and life events in the classroom : Vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 612-617.
- 三井宏隆 (1983). Learned helplessness theory その理論と展開 実験社会心理学研究, **22**, 143-155. (Mitsui, H. (1983). Learned helplessness theory : Theory and expansion. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **22**, 143-155.)
- 宮田加久子 (1989). 無気力の社会心理学 学習性無力感理論に対する認知的アプローチ 帝京社会

- 学, 2, 127-159. (Miyata, K. (1989). Social psychology of helplessness : Cognitive approach to learned helplessness theory. *Teikyo Sociology*, 2, 127-159.)
- 森本幸子・丹野義彦 (2004). 大学生における被害妄想的観念に関する研究—素因ストレスを用いて— 心理学研究, 75, 118-124. (Morimoto, S., & Tanno, Y. (2004). A study of paranoid ideation in college students : An approach with the diathesis-stress model. *Japanese Journal of Psychology*, 75, 118-124.)
- Morling, B., & Evered, S. (2006). Secondary control reviewed and defined. *Psychological Bulletin*, 132, 269-296.
- 名倉祥文・橋本 宰 (1999). 考え込み型対処スタイルが心理的不適応に及ぼす影響について 健康心理学研究, 12(2), 1-11. (Nagura, Y., & Hashimoto, T. (1999). Effects of ruminative response style on mental maladjustment. *Japanese Journal of Health Psychology*, 12(2), 1-11.)
- 中島由佳 (2005). コントロール尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 人間文化論叢 (お茶の水女子大学大学院人間文化研究科), 8, 183-192. (Nakajima, Y. (2005). Development and validation of the control scale based on the life-span theory of control. *Journal of the Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University*, 8, 183-192.)
- Overmier, J. B., & Seligman, M. E. P. (1967). Effect of inescapable shock upon subsequent escape and avoidance learning. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 63, 23-33.
- Peterson, C., Maier, S., & Seligman, M. E. P. (1993). *Learned helplessness : A theory for the age of personal control*. New York : Oxford University Press. (ピーターソン, C.・マイヤー, S. F.・セリグマン, M. E. P. 津田 彰 (監訳) (2000). 学習性無力感 パーソナル・コントロールの時代をひらく理論 二瓶社)
- Roth, S., & Bootzin, R. R. (1974). Effects of experimentally induced expectancies of external control : An investigation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 253-264.
- Rothbaum, F., Weisz, J. R., & Snyder, S. S. (1982). Changing the world and changing the self : A two-process model of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 5-37.
- 坂本真士 (1997). 自己注目と抑うつ の社会心理学 東京大学出版会
- Seligman, M. E. P. (1975). *Helplessness : On depression, development, and death*. San Francisco, CA : W. H. Freeman. (セリグマン, M. E. P. 平井 久・木村 駿 (監訳) (1985). うつ病の行動学 学習性絶望感とは何か 誠信書房)
- Thompson, S. C., Thomas, C., Rickabaugh, C. A., Tantamjarik, P., Otsuki, T., Pan, D., Garcia, B. F., & Sinar, E. (1998). Primary and secondary control over age-related changes in physical appearance. *Journal of Personality*, 66, 583-605.
- Trull, T. J., & Sher, K. J. (1994). Relationship between the five-factor model of personality and Axis I disorders in a nonclinical sample. *Journal of Abnormal Psychology*, 103, 350-360.
- 塚原拓馬 (2002). 二次的コントロール尺度作成の試み—LH理論における統制の知覚要因— 青山心理学研究, 2, 27-36. (Tsukahara, T. (2002). A construction of Secondary Control Scale : The perceived control factor on learned-helplessness theory. *AGU Journal of Psychology*, 2, 27-36.)
- 塚原拓馬 (2007). 学習性無力感研究—その理論的系譜と理論モデルに対する—考察— ソーシャル・モチベーション研究, 4, 37-51. (Tsukahara, T. (2007). A study of learned helplessness theory : A consideration of the genealogy LH theory and the theory model. *Japanese Journal of Social Motivation*, 4, 37-51.)
- 塚原拓馬 (2008). 2次コントロール研究の展望—学習性無力感理論修正と生涯発達心理学への示唆— 心理学評論, 51, 396-414. (Tsukahara, T. (2008). The genealogy of secondary control : A suggestion of reformulating learned helplessness theory and life-span development psychology. *Psychological Review*, 51, 396-414.)
- Weiner, B. (1974). *Achievement motivation and attribution theory*. Morristown, NJ : General Learning Press.
- Weisz, J. R., Rothbaum, F. M., & Blackburn, T. C. (1984). Standing out and standing in : The psychology of control in America and Japan. *Amer-*

- ican Psychologist*, **39**, 955-969.
- Wenzlaff, R. M., Wegner, D. M., & Roper, D. W. (1988). Depression and mental control : The resurgence of unwanted negative thoughts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 882-892.
- Wortman, C. B., & Brehm, J. W. (1975). Response to uncontrollable outcomes : An integration of reactance theory and the learned helplessness model. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 8 (pp. 278-336). New York : Academic Press.
- Wortman, C. B., & Dintzer, L. (1978). Is an attributional analysis of the learned helplessness phenomenon viable ? : A critique of the Abramson-Seligman-Teasdale reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 75-90.
- Zung, W. W. K. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

謝 辞

本研究の作成にあたりご指導を頂いた、青山学院大学の遠藤健治教授に深く感謝申し上げます。また、膨大な数に渡る学生の皆様にご協力を頂いた。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

(2008.11.7 受稿, '09.12.1 受理)

Back/up Effects of Primary/Secondary Control Strategies in Negative Situations

TAKUMA TSUKAHARA (UEDA WOMEN'S JUNIOR COLLEGE)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2010, 58, 186-197

Primary/secondary control theory assumes a back/up model in which secondary control (SC) compensates for declines in primary control (PC) in averting depression. In a series of studies, scales were developed to assess primary and secondary control, and then the back/up model was examined with those scales. In Study 1, 798 respondents answered an open-ended questionnaire regarding cognitive strategies used in negative situations. A questionnaire of items derived from their answers was administered to 564 respondents in Study 2. Exploratory factor analysis revealed 4 factors : solution orientation, causal analysis, meaning acceptance, and thought adjustment. Confirmatory factor analysis revealed that the former 2 factors loaded on a higher-level factor of primary control, whereas the latter 2 factors loaded on a higher-level factor of secondary control. Another questionnaire, including the primary control and secondary control scales as well as a scale of depression tendency, was administered to 645 respondents in Study 3. Analyses of variance were conducted to investigate differences in depression tendencies between those with high and low scores on each of the primary/secondary control scales. Significant interactions were detected between primary and secondary control, and also between solution orientation and meaning acceptance. There were no significant interactions between solution orientation and thought adjustment, causal analysis and thought adjustment, or causal analysis and meaning acceptance. On the whole, these results provide support for the back/up model.

Key words : secondary control, primary control, negative situations, learned helplessness theory, back/up model